

も言える。

こういった世界の古典は、読者の人生において何らかの示唆を与え、考え方を豊かにしてくれる。忙しい日々の生活の中で、ややもすれば情報を読むことに偏りがちな今日である。情報として読み捨てられ、消費される方が多いのかもしれない。それとは対照的に、知識を増やし、深く考える読書は、大学時代に体験しておく知の作業である。幸いに日本では、外国の本の翻訳が大方出ている。読んでいない人がいれば、即図書館に直行し数冊借りて世界を読んでみてほしい。

## 中国古典詩歌に見える「青虫」

経営学部

矢田 博士

### 一、はじめに

「青虫」と聞いて、皆さんはどのような虫を真っ先に思い浮かべるだろうか。おそらく多くの方は、キャベツの葉をむしゃむしゃ食べるモンシロチョウの幼虫のような虫をイメージされるのではないだろうか。ちなみに、『広辞苑』第六版（岩波書店）では、「青虫」について「モンシロチョウ・スジグロシロチョウの幼虫。体長約四センチメートル。色は緑色。菜の害虫。また、蝶や蛾の、緑色で長毛や棘のない幼虫の総称。」と説明している。

ところで、中国の古典文献に見える「青虫」もまた、蝶や蛾の幼虫を指すのだろうか。もちろんそれも含まれるものの、それだけに限定されるわけではなく、青や緑色の虫であれば、広くそれを「青虫」と称しているようである。実際、古典詩歌に見える「青虫」を調べてみたところ、やはり蝶や蛾の幼虫のほかにも、いろいろな虫が「青虫」

という言葉で表現されている。本稿では、中国の古典詩歌において、どのような虫が「青虫」と表現されているのか、確かめてみたいと思う。

### 二、詩歌に見える「青虫」

試みに唐詩と宋詩における「青虫」の用例を調べてみると、唐詩に七例、宋詩に二十五例の計三十二例が確認できる。紙幅の関係上、その全てを挙げることはできないので、比較的わかりやすい例を挙げ、どのような虫が「青虫」と表現されているか、見ていきたい

\*

#### 【蝶の幼虫と特定される例】

青虫也学莊周夢	青虫も也た莊周の夢に学 び
化作南園蛺蝶飛	化して南園の蛺蝶と作り て飛ぶ

唐・徐夔<sup>じょいん</sup>の七言絶句「初夏戲題 [初夏 戯れに題す]」の冒頭の二句である。『莊子』内篇「齊物論」に見える、夢の中で蝶と化した莊周の故事<sup>(1)</sup>を用いて、「青虫もまた、夢に蝶と化した莊周の真似をして、蝶となって南の園に飛ぶ」と詠う。ここに見える「青虫」が蝶の幼虫であることは、明らかであろう。

\*\*

#### 【蛾の幼虫と思われる例】

青虫彫病葉	青虫 病葉に彫り
白鳥篆平沙	白鳥 平沙に篆す

南宋・華岳<sup>かがく</sup>の五言律詩「遊溪西寺 [溪西寺に遊ぶ]」の頷聯の二句である。「青い虫が模様を彫り刻むかのように病んだ木の葉を食べ、白い鳥が篆書<sup>(2)</sup>を書くかのように平らな砂の上に足跡をつける」と詠う。ここに見える「病んだ木の葉を食べる青虫」は、芋虫や毛虫のような蛾の幼虫と見てよいであろう。

\*\*\*

#### 【蝗の類と思われる例】

去年稻田荒	去年 稻田の荒るるは
-------	------------

七月青虫起 七月 青虫の起こればなり す。》

南宋・方一夔<sup>ほういつき</sup>の五言古詩「喜雨 [雨を喜ぶ]」の冒頭の二句である。「去年、稲田が荒れたのは、七月に青虫が発生したからだ」と詠う。例えば、『三国志』巻一「魏書・武帝紀」に、「蝗虫起、百姓大餓 [蝗虫 起こり、百姓 大いに餓う]」とあるように、ここに見える「旧暦の秋七月に発生し稲田を荒らした青虫」もまた、おそらく蝗の類であると判断される。

\*\*\*

【蜘蛛と思われる例】

青虫当戸織 青虫 戸に当たりて織り  
白鳥背人飛 白鳥 人に背きて飛ぶ

南宋・俞德隣<sup>ゆとくりん</sup>の五言律詩「山林楽 [山林の楽しみ] 四首」其一の頸聯の二句である。「青い虫が戸口に面して糸を織り、白い鳥が人から離れるように飛んでいく」と詠う。ここに見える「戸口のあたりで糸を織る青虫」は、おそらく蜘蛛と思われる。

南朝梁・沈約<sup>しんやく</sup>の五言古詩「直学省愁臥 [学省に直し愁い臥す]」に、

網虫垂戸織 網虫 戸に垂れて織り  
夕鳥傍欄飛 夕鳥 欄に傍いて飛ぶ

《虫が戸口のあたりに身を垂らし糸を織って網を張り、鳥が夕暮れ時に軒にそって飛んでいく。》

という、俞德隣の前掲の二句と極めてよく似た対句がある。沈約のこの詩は、唐宋の詩人の必読書であった『文選<sup>(3)</sup>』にも収められているため、俞德隣も当然この詩を読んでいたはずである。俞德隣の前掲の二句は、沈約の句を意識して作られたものと見てよいであろう。

また、唐・元稹<sup>げんしん</sup>の五言律詩「秋相望 [秋に相い望む]」の頷聯に、

蠨蛸低戸網 蠨蛸 戸に低れて網す  
螢火度牆陰 螢火 牆を度りて陰す

《蠨蛸は戸口に垂れて網を張り、螢は垣根を越えて飛び去り、辺りはいっそう暗さを益

とあり、同じく元稹の五言古詩「江辺四十韻」に、以下のようにある。

断簾飛熠燿 簾を断ちて 熠燿 飛び  
当戸網蠨蛸 戸に当たりて 蠨蛸 網す  
《その一筋の光りが簾を断つかのように 熠燿が飛び、戸口に面して 蠨蛸が網を張る。》

「蠨蛸」は、蜘蛛の一種である。以上の先行作品との関連から判断して、俞德隣の前掲の二句に見える「戸口のあたりで糸を織る青虫」は蜘蛛を指すと判断されるわけである。

\*\*\*\*\*

【蝉と思われる例】

青虫鳴向夕 青虫 鳴くは夕べに向かえばなり

玄鳥去因秋 玄鳥 去るは秋に因ればなり  
《青い虫が鳴くのは夕暮れ時になったからであり、玄い鳥（つばめ）が南に飛び去るのは秋になったからである。》

南宋・釈文珣<sup>しゃくぶんきゆう</sup>の五言律詩「秋懷 [秋の懐い]」の頸聯の二句である。ここに見える「秋の夕暮れ時に鳴く青虫」とは、蝉を指すと思われる。

唐・裴迪<sup>はいてき</sup>の五言律詩「夏日過青龍寺謁操禪師 [夏日 青龍寺に過りて操禪師に謁す]」の頸聯の二句に、

鳥飛爭向夕 鳥 飛び 争いて夕べに向かい  
蝉噪已先秋 蝉 噪ぎ 已に秋に先んず  
《鳥が夕暮れ時に競うように飛び、蝉が秋になる前にすでに鳴いている。》

とある。「向夕」という同じ表現が同じ箇所用いられている点、「秋」という字が同じ箇所用字として用いられている点、「青虫鳴 玄鳥去」と「鳥飛 蝉噪」といった具合に、「鳴き噪ぐ虫（青虫/蝉）」と「飛び去る鳥（玄鳥/鳥）」とを対比させて詠うという発想の共通性、などから判断して、釈文珣の前掲の二句が裴迪の句を意識して作られたものであることは、ほぼ疑いないであ

ろう。

そもそも、季節は秋、時は夕暮れ、「鳴く蝉」と「飛び去る鳥」とが一对のものとして対比的に詠われる例はしばしば見られ、例えば、唐・岑参の五言古詩「陪狄員外早秋登府西樓因呈院中諸公[狄員外に陪し、早秋に府の西樓に登り、因りて院中の諸公に呈す]」にも、

蝉鳴秋城夕 蝉は鳴く 秋城の夕べに  
鳥去江天長 鳥は去る 江天の長きに  
《蝉が秋の夕暮れの街に鳴き、鳥が遥か遠く江が天と接するあたりに飛び去る。》

とある。なお、岑参の句に見える「蝉鳴 鳥去」という対比表現を、釈文珣の前掲の二句に見える「青虫鳴 玄鳥去」という対比表現と比べてみた場合、釈文珣が発想を直に岑参から受けたかどうかは定かではないものの、少なくとも両者の表現の類似性については、明らかに認められよう。

以上、先行作品との関連から、「秋の夕暮れ時に鳴く青虫」とは、日本の俳句でも秋の季語とされているヒグラシや夏の終わりから秋にかけて鳴くツクツクボウシの類の蝉を指すと判断してよいと思われる。ちなみに、中国では古くから蝉の色を「青」と捉えていたようで、例えば唐・李賀の七言絶句「南園十三首」其三の承句に、「青蝉獨噪日光斜[青蝉 独り噪ぎて 日光 斜めなり]」とあり、夕暮れに鳴く蝉が「青蝉」という言葉で表現されていることから、それが確認できるであろう。

### 三、おわりに

以上、唐宋の詩に見える「青虫」の例について確認した。日本では一般に「青虫」と言えば、「蝶蛾の幼虫」を指すようであるが、冒頭でも述べたように、中国の古典文献では、青や緑色の虫であれば、広くそれを「青虫」と称している。そして、唐宋の詩においても、「蝶蛾の幼虫」のほかに、「蝗」「蜘蛛」「蝉」など、いろいろな虫が「青虫」と表現されていた。

ところで、北宋・秦觀の七言絶句「秋日三首」其二の後半の二句に、

風定小軒無落葉 風 定まりて 小軒に落葉  
無し  
青虫相對吐秋糸 青虫 相い対して 秋糸を  
吐く

とあり、木の葉を吹き散らしていた風がやみ、静けさをとりもどした小さな離れのあたりで、「秋の糸を吐く青虫」が描かれている。いったいこの「青虫」は何か。一説に「蝶蛾の幼虫」を指すと言ひ、また一説に「蜘蛛」を指すと言うが、筆者はこの「秋の糸を吐く青虫」を「蝉」だと考えている。「蝶蛾の幼虫」や「蜘蛛」ならともかく、「蝉」は糸など吐かないではないかと思われるかもしれないが、実は「秋糸」という言葉こそ、「蝉」説を有力に支持する論拠ともなりうるのである。この点については、稿を改めて詳しく述べてみたい。

### 【注】

- (1) 莊周が夢の中で胡蝶になり、目が覚めたあと、自分が夢で胡蝶になったのか、それともまだ夢の中で、胡蝶の方が自分になっているのか、分からなくなってしまった、という故事。「胡蝶の夢」という言葉としても知られ、自他の区別を超越した境地を喩える。あるいはまた、人生のはかないことを言う。
- (2) 隸書・楷書・行書・草書などと同様、漢字の書体の一つ。周の太史籀が作ったとされる「大篆」と、秦の始皇帝の時の宰相であった李斯が作ったとされる「小篆」とがある。秦代に公式の標準書体として使用され、隸書や楷書のもととなった。流麗な曲線を頻繁に使った装飾性に富んだ書体で、今日では印章に多く用いられる。
- (3) 南朝梁の昭明太子・蕭統が劉孝綽らに命じて編纂させた詩文集。先秦から南朝梁の初期までの規範的な詩文の作品を収録する。日本でも古くから読まれ、例えば清少納言の『枕草子』にも、「文は文集、文選、はかせの申文」とある。